

研究ノート

De Pulchro et Apto への Poseidonios

の影響 1

加藤 武

序 説

さきに我々はアウグスティヌスの処女作《De Pulchro et Apto》を、主としてマニ教が与えた影響という側面から考察した。(『インテリオル・メロディア I』, 立教大学研究報告17, 1964)ここではボセイドニオスが与えた影響⁽¹⁾を探ることにする。

註(1) 従来の研究は圧倒的にギリシヤ、ローマ思想の資料についてなされた。Svoboda はプラトンに (*L'esthétique de saint Augustin* Brno, 1933). Testard はキケロに (*Saint Augustin et Cicéron I*, Paris 1958) さらに Solignac は *Nicomache de Gérasa*, *Introduct. arithm.*, éd. Hoche, II, XVII, I; XVIII, let4; XIX, 1; XX, 2; *Theologum. arithm.* éd. de Falco, VI, 4 sr; Pseudo-Plutarquo, *De vita et poesi Homeri*, 246に資料的源泉を求めた。(Doxographies et manuels §3 Sources pythagoriciennes, dans *Recherches augustiniennes*, I, p.129~137) しかしボセイドニオスとの関係からの考察は行われていないように思われる。Svobodaは、*De Ordine* への影響を指摘し、そこでピュタゴラスの説として登場する思想がボセイドニオスに由来することを論証した。*L'Esthétique* p.44, A. Dyroff は一応そのようなボセイドニオスによる影響の可能性にふれているが懐疑的である。Grabmann-Mausbach, *Aurelius Augustinus*, 1930, p.15s. しかし我々はすでに *De Pulchro et Apto* の中にボセイドニオスの影響がみられると考える。

しかし資料問題に入るに先立って、予め、アウグスティヌスの思索の態度乃至

方法について、四つの点を指摘しておくことにする。

(1) いわゆる影響について。

『そして、そのような考察は私の内奥なる胸底より、精神[のあかるみ]へと、滾滾と湧き溢れ始めた。』 Conf, IV, 13, 20. <Et ista consideratio scaturiit in animo meo ex intimo corde meo,……>

この一節には、若き日の思索が、泉のように溢れて止まぬ姿が、躍如として描かれており、その思索の獨創性が、鮮かに窺い知られる。<De Pulchro et Apto>の後の追想の中で、彼は次のように言う。

『哲学者の多くの書を読み、記憶にゆだねて、保持していた。』 Conf, V, 3, 3. <Multa philosophorum, legeram, memoriaeque mandata retinebam……>

ここで *memoriaeque mandata* と言われている点に注意したい。彼は多くの書物を、一度記憶の底に沈め、やがて、内的な衝迫の命ずるままに自由に取り出ししてくる。そこに、いかに多くの思想の影響が見られるとしても、あくまで根源的な、主体的な自由に基づいて回想されているのであるから、決して一見、他の思想との並行した類似乃至同一の表現がみられるからといって、機械的に影響を云々することが出来ない。従って我々の考察も、より一層厳密には、ポセイドニオスの *influence* でなく *réminiscence*⁽²⁾ を探ることでなければならない。

註(2) この *influence* でなく *réminiscence* であるという点を Solignac によって教えられた。A. Solignac, *Réminiscences Plotiniennes et pythagoriciennes dans le début du "De Ordine" de saint Augustin*, dans *Archives de Philosophie*, Jui llet-Sepembre, 1957 p. 464

(2) *meditatio*

『しかしながら、かの *De Pulchro et Apto*……を、私の観想の眸のもとにおいて、精神の裡に、想を廻すことを悦んだ……』 Conf. IV 14, 23. <Et tamen pulchrum illud et aptum, …… libenter animo *versabam ob os contemplationis meae*……>

この箇所は、アウグスティヌスの思索が、いかに瞑想的であったかを示す。思考は、迂回しつつ、上昇する。(Berlinger, *Augustins dialogische Metaphysik*)

(3) *comparatio*

『…その中の或るものを、マニ教徒のあの冗長な寓話（作り話、神話）と比較した。』 Conf. V, 3, 3. *«ex eis quaedam comparabam illis manichaeorum longis fabulis,……»*

この一節は、先きに引用したテキストに続く部分であるが、ここで彼は「哲学者達の書物」と「マニ教徒の作り話」とを比較している。

註(3) Solignac は *«Doxographies…»* において、*«multa philosophorum»* の内容を推定して、従来よりも遙かに広範囲の読書がなされたことを論証した。cf. P. Alfarić, *L'évolution intellectuelle de saint Augustin, I, Du Manichéisme au Néoplatonisme*, Paris, 1918, p. 131, Alfarić は *multa* を文字通りとすることはできぬという。

アウグスティヌスは十九才の時、キケロの *«Hortensius»* を読んで深い感動を受けたのであるが、*«De Pulchro et Apto»* も亦、哲学者達の多くの書物の影響を受けたことは言うまでもない。しかしそれは、従来しばしば、人々が説くように単にキケロー、ヴァロー、ピュタゴラス派など、ギリシャ、ローマの哲学者達の影響にのみ依ったのであろうか。

彼は、*De Pulchro et Apto* を、次の順序に従って考究せんとした。即ち

1. 感覚論 2. 靈魂論 3. 神論

しかし彼の説くところによると、マニ教の迷妄に禍いされて、靈魂の意義を正しく把握することができなかったという。従って彼が、マニ教の存在論に深く影響されていたことは確実である。

それでは、この二つの源泉、ピュタゴラス主義とマニ教は、いかなる関係に置かれたのであるか。

アウグスティヌスにおいては、マニ教はピュタゴラス主義よりも一層深い基底に置かれていたように思う。（ここには重層的構造がある。）

彼の思考の一つの特色は比較という方法にある。彼は生涯の転期において、しばしば比較を試みた。

「それを、キケロの（文体の）荘重さと比較した。」 Conf. III, 5.9. *«quam Tullianae dignitati comparabam.»* ここに私は読んだが…、ここには読まなかった。同様に…、ここには読んだが…、

ここには読まなかった。』 Conf. VII, 9, 13—14. *«ibi legi, … non ibi legi. Item legi ibi, … non ibi legi»*

すなわちキケロの《Hortensius》を読んだ直後、聖書に赴いてこれと比べたが、聖書の文体の簡素なるに失望したが、後に *libri Platoniorum* (プラトン派の書物) を読みその直後、これとヨハネ伝プロローグとの比較を試みている。彼の場合、比較と言っても、冷静に、客観的に両者を眺めるそれではない。比較の規準は、常に聖書にあった。そして聖書への郷愁は、遠く幼児の日、母モニカの胸においてキリストの名を吸うた記憶にまで遡る。アウグスティヌスが、キケロよりマニ教へと進んだ理由が、《Hortensius》の中に、キリストの³聖名が無かったことに求められていることは重く深い意味をもつ。

「なぜなら、キリストの名がここになかったから」 Conf. III, 4, 8. *«quod nomen Christi non erat ibi, …»*

このようにみえてくると、《De Pulchro et Apto》執筆の時期に、二年後のようなマニ教への鋭い批判 (*fabulae*) に基づく、《*multa philosophorum*》との比較が、すでに自覚的に行われたとは思われないが、すくなくとも *multa philosophorum* は、マニ教の土台の上に置かれたということは言えよう。従って従来の、ややもすれば、単色的に、ギリシヤ・ローマの資料からのみ行われた資料の探索は、構造上すでに甚だ不完全である。

(4) Extasis

アウグスティヌスは、すでに《De Pulchro et Apto》執筆の頃から、神秘的な Extasis、神との合一をめざしていた。これは美学的、プラトニックな τὸ καλόν と τὸ πρέπον (Hippias majeure; 290a-296 cf. Banquet, 211d; Phèdre 249d, 264c) の二分法も、マニ教的二元論的存在論よりも一層奥深くに、(或いは、それよりも前に)、目指されていたことを見逃してはならない。この書物が元、レトリカ的美を論じたものではなかったという推定(長沢信寿博士)も、もとより可能であるが、それに尽きるものでないことも指摘されねばならない。

それはしかしこの時期においては、挫折の形で表われた。

『けれどもわたくしは、爾のみもとに到ろうと努めたが、爾のみ手によって、拒けられた [つきかえされた]』 Conf. IV, 15, 26. *«Sed ego conabar*

ad te et repellebar abs te)

従って美についての思量は、究極においては、美なる神を眺めることであり、マニ教の詩篇に多くみられる如き、doxologie に終るものであった。これを Confessiones 執筆当時のヒッポの司教の神学的反省乃至文学的修辭とみることは出来ない。